OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	座とコミュニケーションをめぐって ： 対談 小林恭×高田珠樹
Author(s)	小林, 恭; 高田, 珠樹
Citation	Communication-Design. 2010, 3, p. 328-341
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/11707
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

座とコミュニケーションをめぐって
—— 対談 小林恭×高田珠樹

小林恭　高田珠樹

小林恭｜Kyo Kobayashi
大阪大学コミュニケーションデザイン・センター　教授

1947年 兵庫県生まれ、70年 京都大学教育学部卒業、75年同大学院教育学研究科（教育学研究科教育人間学専攻）単位取得退学、京都産業大学講師を経て、79年より大阪外国語大学勤務、比較思想を担当。2007年の阪大との統合によりCSCDに移籍。近代フランスの哲学的情念論の研究から出発し、禅、S・ヴェイユ、F・ナイチンゲールの思想に関心を寄せる。著書に『京都学派の思想』（人文書院、2004年、共著）や『禅と京都哲学』（燈影舎、2006年、共著）など。

高田珠樹｜Tamaki Takada
大阪大学コミュニケーションデザイン・センター　教授

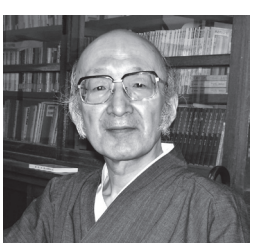
1954年福井県生まれ。76年大阪外国語大学卒業。81年京都大学大学院文学研究科（文学研究科哲学専攻）単位取得退学。同年、大阪外大助手、98年同教授。2007年の阪大との統合に際しCSCDに移籍。引き続き外国学部教授を兼任。現代のドイツ語圏の哲学と思想を研究するが、最近は『フロイト全集』（岩波書店）の編集に従事。著書に『ハイデガー―存在の歴史』（講談社、1996年）、訳書にハイデガー『言葉についての対話』（平凡社、2000年）など。

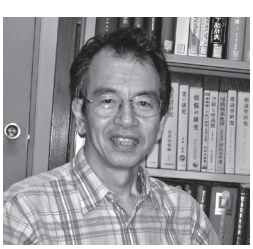
大学の統合とCSCDへの移籍

高田　今回のオレンジブックの企画では、それぞれのスタッフがCSCDで取り組んでいることや、CSCDと自分の関わりについて検証することを求められています。ただ、私たちの場合、大阪外大と阪大が統合した際にCSCDに移ったわけですが、それからまだ一年半が過ぎたばかりで、教員としての活動は今でも外国語学部での教育が大半を占めています。

しかも、同じく統合の際に外大から移籍した森栗茂一さんや林田雅至さんの場合、実際に長年、社学連携的な仕事をしてこられ、統合に際しても当初からCSCDを希望して移籍されていますが、私たちについては、CSCDへの移籍というのは、いくらか唐突な話で、正直なところ、どういう組織であるかもよく分からないままに移籍してきた、という面があります。そんなわけで、自分がCSCDやその活動にどう関わってきたかを検討しようにも、それだけの材料もないように思います。そこで、今回は、私たちが、こちらに移ってきた経緯を振り返りつつ、すでに一定の形となっていたCSCDに移ってきて、大学の組織としては特異なものと言えるセンターについてどのように感じたか、について話してはどうか、と思います。

［写真］　小林恭（上）、高田珠樹（下）





二人ともすでに相当、長く大阪外大で教員をしてきました。私自身、外大に助手として就職したのが28年前で、人生の半分以上を箕面のキャンパスで教員として過ごしたことになります。小林さんは、さらにその数年前に外大に着任され、教員生活の締めくくりの時期に当たる数年間を、CSCD所属の教員として過ごされることになったわけですが、外大の教員としてのこれまでの経験に照らして、CSCDをどう感じるか、そのあたりを中心に話を進めたいと思います。

小林　私が大阪外大に就職したのは1979年で、この春でちょうど30年になりました。京大の教育学の大学院を終えて、1年間オーバード

クターをしたあと、京都産業大学にフランス語の教員として就職し、3年間いました。そこでは、教育哲学などの科目は一切担当していませんでした。外大で私の前任の先生が停年を迎えられ、教職科目担当ですから空席にしておくわけにはいかず、その先生が退官されたのと入れ替わりに私が着任したのです。

高田　その時期、私は京大の哲学科の大学院にいました。後に阪大に移られる大峯顕先生が当時、まだ外大におられたのですが、京大に非常勤で出講しておられました。授業のあと一緒に食事をしたりすることがあり、その際、今度、上田閑照さんのお弟子さんに教育学の担当で来てもらうことになったという話をうかがった記憶があります。外大に就職されて以後は、科目としては主として何を担当してこられましたか。

小林　教育原理、教育哲学など、教職科目を責任をもって運営する係りです。外大の教職科目の運営責任者となるということを条件として採用されたのです。教職関係の科目には非常勤講師も十人以上いて、あちらこちらに連絡したりする、そういう仕事をずっとしてきたわけです。

高田　就職直後からそれを担当するのは大変ですね。

小林　最初は心理学に大澤春吉先生がおられ、先輩としていろいろアドヴァイスをちょうだいしていたのですが、間もなく亡くなられたのです。それで今度は私が、後任人事を申請する形で、芋阪満里子さんに来てもらいました。

高田　では、芋阪さんもこちらでは教育心理学を担当しておられたのですか。私は、知覚心理学を専門にしておられると思っていました。

小林　いや、あくまで教育心理学の中で、特に脳波を研究しておられたのです。その点では、前任の大澤先生も同様で、そのための実験設備を持っておられましたから、芋阪さんにはその設備も引き継いでもらったわけです。

外大時代に行なわれた改革のあと、私たちも、国際文化学科の中の比較思想というひとつの専攻として独立し、自分たちの学生を持つ

ようになりましたが、外大全体の教職科目の世話はずっと続けてきました。

阪大との統合後は少し様子が変わって、新外国学部には教職課程委員会というのがあるのですが、これには私は参加していません。ただ、旧課程の学生たちがまだ後期には残っていますから、彼らの教育実習の世話などは私が担当しています。新課程の学生たちについては、人間科学部が責任をもって担当してくれることになっています。全学的に教職科目は人間科学部のほうで担当してもらっているのです。私は、旧課程の学生たちが最終的に出て行くまで、その世話をすることになっています。ただ、教職の資格を取るのには通常より多くの科目が必要ですから、留年する学生も多く、今後2年間で終わるというわけにはいかないでしょう。いずれにせよ、外大ではずっと教職科目の世話をしてきて、教職を志望する学生たちと縁がありました。

高田　私は、大阪外大がまだ天王寺区の上本町にあった時代の1976年にそのドイツ語学科を卒業して、京大の哲学科の大学院に進みました。5年後、大学院を終えて、やはりドイツ語学科に助手として就職しました。そのあいだに大学は大阪市内から箕面に移転していました。外大に就職してからは、哲学や思想に関わる授業を持つことがあっても、あくまでドイツ語専攻の学生を対象としたもので、基本的にドイツ語やドイツ関係の授業を担当してきました。だから、統合の際にも必ずしも哲学や思想のことをぜがひでも担当したいと考えていたわけではありません。CSCDに誘われた際、当時、センター長を務めておられた中岡成文さんには、社学連携的な活動も含めて、考えてみないか、と言われたのですが、自分にできそうなこととしては、あまり具体的なイメージが湧きませんでした。ただ、ドイツ語専攻の中で、現代ドイツの社会や文化について、広く、学生の関心に基づく発表を中心にした授業をやっていたものですから、それを、たとえば学外の場で、外側の人と協力する形で組織するといったことを考えたりもしました。現在の総長の鷲田清一さんは、当時、副学長として、阪大側を代表して統合に向けた作業に携わっておられましたが、目下、刊行中の岩波書店の『フロイト全集』の編集会議でもしばしばお会いする機会がありました。鷲田さんからは、実際、私がこれまで授業で取り上げてきた現代のドイツの諸問題について考える授業や、ニュース映像などを用いた授業を、ドイツ語専攻という狭い枠からはずれて、学内で複数の

学部や研究科にまたがる広い枠組でやってみてはどうか、といった形で誘われもしたのです。必ずしも学外のことを念頭に置く必要はない、という感じでした。ただ、実際に統合してCSCDに移ってみると、たとえ学内向けであっても、授業の開設には意外に様々な制約もありますから、その種のものはまだ実現していません。

CSCDの所属教員になって

高田　小林さんの場合、CSCDでは、どのような授業を担当していらっしゃいますか。

小林　箕面でこれまで旧課程の学生のために行なっていた思想関係の三種類の授業をそのままCSCDが提供する科目として共通教育で行なうほか、新しく「ケアの人間学」という授業を大学院で担当するようになりました。そのような主題に対する関心は以前からありましたが、タイトルにそれを冠した授業はこれまで行なったことがなく、これを担当することで、自然に注意もそちらに向かうことになり、これまで勉強してきたことを少し広げられたという気はします。

高田　その授業では、CSCDという組織を意識して、その一員として、この授業を行なうという意識はありますか、

小林　いや、それはあまりないですね。私なりに深いところではあることはあるのですが…。

高田　私も大学院の共通科目として「研究の社会的責任」と題するCSCDの科目を担当しています。もちろんこれまで外国語学部で持ったことがない科目だし、おそらくCSCDだからこそ提供する科目だとは思います。ただ、すでにCSCDによる授業提供が始まっていたと

ころへ、私たちが入っていったので、担当する者が言うのも変ですが、CSCD科目としてはたしてこれでよいのかな、という心配が常に付きまといます。他の大学に非常勤講師や兼任教員として出向いて、いろいろな科目を担当しても、そういったことを感じたことはなく、CSCD科目とはどうあるべきか、自分でもよく了解できていないからそうなるのだと思います。おまけに、私たちが移籍する以前にすでにこちらにおられたスタッフが担当するコミュニケーションデザイン科目の多くが、複数のスタッフによって運営されていて、おそらくそれだと、担当する教員にとっても、あるいは受講する学生たちから見ても、いかにもCSCDらしい授業だと感じられるのでしょうが、それに比べると、私のこの授業は、通常の授業と同じく、最初から最後までひとりで行なっているせいもあって、その意味ではあまりCSCDらしくない授業であるのかもしれません。学生によるプレゼンテーションが中心で、総じてずいぶん工夫したプレゼンテーションをしてくれて、私にとっても刺激になって面白い半面、学生には出席への拘束感が薄いし、私も、自分の専攻の学生を相手としているわけではないので、あまり強く出にくく、運営も試行錯誤の連続で、そのあたりがむしろCSCD的と言えるかもしれません。

小林　私は、この4月から、CSCDの中で行なわれている「現場力研究会」という研究会に出ています。これは主に臨床関係の方が中心になっていて、そこにアートや科学コミュニケーションの人たちも参加しているのですが、やはり対話をしていると得るところはあり、面白いですね。取り上げられるテクストのタイトルを見て、哲学的で面白そうだと思って参加し始めたのですが、いろいろ分野の違う人同士が話し合うので、むしろ、これなぞは、私にとってCSCDならではの刺激が得られるいい機会です。これまで塚本明子さんの『動く知　フロネーシス』を読んできましたが、一通り終わって、今度は、おそらく上野千鶴子さんらが編集している『ケアの思想と実践』が取り上げられることになると思います。そのシリーズに収められている論文のうちから、各自が気に入ったものを取り上げて報告するのですが、一度にだいたい二本のペースになるはずです。ずいぶん速いんですよ、この研究会は。

高田　そうですか。それだと目下のところは、私にはちょっと無理ですね。CSCDに移って、思っていたのと違うな、というのは何かありま

したか。

小林　私は、これと言って何も思っていなかったものですから、そういったギャップとか落差というのは、あまりありません。もちろん、大学の中の通常の部局とはずいぶん違っているから、それは驚きましたよ。物理的に言えば、部屋をぶち抜きにして、何もかもがずいぶん開放的な雰囲気の中で運営されている。文字通りにガラス張りで、大学にもこういう在りようもあるのか、という気がしました。それはそれで面白いと思います。行なわれている事柄についても、社学連携の事業など、たしかに通常の大学のアカデミックなものとはかなり違っている。これにも、確かに面食らいました。新しい学問の構想と見れば、相応の意義を持つのだと思います。

座と座学

小林　ただ、阪大と一緒になるに当たって、印象に残ったのは、「座学」という言葉を何度か耳にしたことです。これは人間科学部の先生とお話していても聞きましたし、CSCDでもしばしば聞きます。シラバスにも出てくる。

「座学」と言われるとき、そこには当然、自分たちは、それとは違う何か、単に座っているだけの学問とは異なった何かを志向しているのだ、という含みがあると思います。これには、率直なところ抵抗があります。私が親しんできた禅では、行くも止まるも、座るも伏すも座の展開と見ます。座以外のものを相対的に立てるのではないような座、そういったものを学生時代から仲間たちと考えてきたものですから、座ということがネガティヴに考えられているのを耳にしてたいへん驚きました。私の場合、臨済禅ですから、さほどでもないですが、座がすべてだと考える曹洞宗の人が聞けば、かなりカチンと来るかもしれません。

学問というのは、そもそも座学ではないでしょうか。フィールドワークに行っても、ものを考える瞬間には、反省として、その場からの離脱が生じている。それを仮に座と呼ぶなら、およそ学問には、プラクシスそのものから一歩引く、そこにコンテンプラツィオを向ける、そういう意味での座としての面があるはずです。これが曖昧となるのには、疑問を覚えます。

高田　たしかにこちらでは「座学」という表現をよく聞きますね。実社会での活動や社学連携といったことがその反対側にあるものとして念頭に置かれています。趣旨としては何となく分かるので、私は、それについて特に考えることもなく、引っかかりも覚えませんでした。むしろ、こちらに移籍してみると、これまで自分が大学の教員として、言うところの「座学」として行なってきたことをそのまま何か社会に還元するというのは、簡単ではないということをあらためて感じさせられます。外国語学部や教育実践センターの授業、またそれぞれの部局の会議や付随する雑用などでそれなりに忙しいこともあって、座学以外のものとして想定されているであろうような社学連携的な活動には特に関与していないので、多少、引け目のようなものを感じてしまいます。

小林　社会に開かれた活動を否定的に見ようというつもりは私も毛頭ありません。それはそれで大切だと思います。ただ、禅で言う座とは非常に広い意味で、原則的には立っていても逆立ちしていても、やはり座であるべきなのです。基礎の練習形態として座布団の上に座るのをとりあえず座と呼んでいますが、動中の静、静中の動と言うように、走り回っていてもやはり座であるわけです。そこまで行かないと、形の上で座っているだけが座であるのなら、相対的な座になってしまいます。

高田　先にそれを離脱とおっしゃった。いわば距離を置くことですね。西洋では、そういったものを「座」とか「座る」とは言わずに、観照なり反省と見ますね。あるいは、ハイデガー流に言うなら、日常性への没入からの脱却、一種の非日常と言うことになると思います。日常の中をせわしく動いていながら、その動く自分に対して静なる自分を樹立していく行為、座というのもそのようなものとして考えてよいですか。

小林　雲水さんたちが道場で行なう座というのは、そういったものだ

と思います。やや形而上学的な物言いになりますが、仏教では、大宇宙というのが大日如来の禅定の姿だ、などと言います。全宇宙が大日如来の座です。その禅定、静寂の中に宇宙がある。個々人が時間をかけて座るというのは個別の禅定です。それはあくまで個人が得るものにすぎない、相対的なものにすぎません。本当は、それを通して全宇宙の禅定を体感する必要がある、それが座なのです。少なくとも、禅の入り口としては、そういうところがあると思います。こうなってくると、世界中を飛行機で飛び回っていても座だ、ということになります。

高田　座る行としての座を通して全宇宙が凝縮して現われてくる、と考えればよいですか。

小林　座を通してと言うと、また手段のような感じになるので具合が悪いのですが…。臨済の場合には、座るだけではなしに具体的な作業を重視します。「動中の工夫は静中にまさること百千万億倍」とか「せぬときの座禅」とかをやかましく言います。動きに即して摑むことが本物だと考えられています。

高田　座というのを、認識と認識されるものとの一致、ないしは一体性と考えてよいでしょうか。

小林　一致というのはどうでしょうかね。存在、あるいは存在物をすべて超える、といった感じです。宇宙旅行よりも広大な旅を一瞬のうちにして帰り、今ここの現在で働く智恵とでも言うべきでしょうか。ともかく禅定は、単に状態と言った静態的なものではなく、働きとしての智そのものであるという点に、六祖慧能以下の禅の宗旨があります。現在の禅宗はみなその系譜ですが…。座というのは、その洞察が自分の中に定まってくる、宇宙大の行為と言えるかもしれません。

高田　禅では、そういった座の洞察について「座学」などとは言わないのですか。

小林　それは言わないです。「座学」という言葉を外大時代には、全く聞かなかったのに、阪大になると、CSCDに限らず、しきりに耳にする、しかも貶めるような意味合いで用いられている、それが少し気に

なるのです。大学に閉じこもっていてはいけない、単なる座学であってはいけない、ということが強調されているように思えます。もちろん、語彙としては「座学」というのは、実学とは違うといったような意味で、世の中でそれなりに定着しているのでしょう。文化人類学では、たとえばフレーザーについて、フィールドワークをしない、椅子に座ったまま研究をしている、という意味でアームチェアの人類学だ、との批判がありますが、「座学」という言葉をいくらか否定的なニュアンスで用いるのは、そのあたりに起源を持つのかもしれません。

高田　社会での活動も含めたような新たな「座学」を構想するというのは可能でしょうか。

小林　私としては、それが一番関心のある問題です。ただ、大きな問題で、表現も難しいし、在任中にCSCDで自分で何とかなるという問題ではないと思います。もっとも、コミュニケーションというのにも、やはりメタフィジカルな観点が必要で、このあたりがもっと深められる必要があると思うのです。

CSCDの場合、専門家と一般人との媒介という観点からだけでなく、臨床のケアということを中心に研究されている人もおられる。ターミナル・ケアなどの現場では、医療の関係者と患者さんとのコミュニケーションというのは、単に専門家と一般人とのあいだのそれということに尽きない何かがあります。こういったところに関心が開かれているのはいいことだと思います。

社会への関与とプラクシス

高田　普段、人が生きて活動しているところでは、常に、何らかの形で、その活動とそれに対する反省というものが同時に作用しています。反省的に生じたテオーリアは、常にまた、その都度のプラクシスにも

反映されていくはずです。広い意味でのプラクシスとテオーリアは、どういった場であれ、常に同時に絡み合っていると言えます。ただ、私たちのように人文系の分野の教員として大学に身を置いて何かを研究している場合、社会に還元するといっても、通常、まずは学生相手の授業でそれを伝え、思いを託す、あるいはせいぜい論文なり啓蒙書なりを通じて、社会にそれを広げる、というくらいのことだと思います。CSCDの場合、それこそ臨床の現場に立っておられた人もいます。もちろん、ひとたび大学というところに身を置くと、現場と理論的な反省とはそれほど直接的に密着したものではなくなってしまうかもしれませんが、その考察は、あくまでこれまでの経験を踏まえ、それを理論的に掘り下げるのだ、あるいは、そういった理論的な反省を再び現場の活動にやがて還元していく、ということで、納得されていると思います。そのあたりは、われわれのように基本的にずっと大学という世界の中にいた者とはだいぶ違っています。

CSCDが発足した当時、その設立に関与したわけでもないので分からないのですが、当初から、理論的な反省や洞察を深めるのと、社会と大学とを媒介することとが、同時に含み込む形で構想されていたのだと思います。その中では個々人の課題や任務も、截然と区別されたり整理されたりしていたのでもなさそうです。そこへもってきて、私の場合、移籍を誘われた際にあまり深く考えないままにやって来たものですから、いざ、来てみると、ここで何をすべきかが自分にとっていまだにきちんと整理できず、CSCDと自分とをどう関係付けるか、困惑する部分があります。もちろん、個人的にはCSCDの大学院共通科目や他の部局の授業も担当していて、大学の中で教員としてこなす仕事が人より少ないわけでもないのですが、CSCDそのもののミッションとの関係で言えば、当惑は消えていません。

小林　そのあたりのことについては、私は居直っているんですよ。CSCDの働きは、必ずしも外で何かを催すということに限る必要はないと思います。ここにいて、一個人がそこで刺激を受ければそれでいいとも思っている。CSCDという名前を冠して何か活動しなくてはいけないというふうに捉えると、余計、自らを狭めてしまうことになるでしょう。CSCDに移って刺激を受ける、あるいはいろいろ戸惑ったことが、様々に授業に反映してくる、それでいいと思っているのです。教育学に関わってきた者として、私は教育の場が効率優先の投資事業のようになっ

て顧客相手の売り物の方向に流れてゆく風潮には抵抗したいです。学生を大切にしているように見えて却って馬鹿にすることにもなりかねません。一人ひとりが宇宙を背景に背負った存在同士のコミュニケーションという面もありますから、授業は私にとって、人数が多かろうが少なかろうが、人間社会どころか宇宙に種を蒔くことです。

高田　そういった達観は、小林さんが座禅などを通じて、長年、精神修行をされた成果ですね。私はなかなかそれだけの境地に至ることができません。

小林　「一隅を照らす即ちこれ国宝なり」と最澄の言葉もあるじゃないですか。私にそれが実行できているということではなく、誰もがそのようであるようにという「願い」は持ち続けたいです。CSCDの運営維持の責任ある立場の方には、また別にいろいろ考えなければならないことがおありなのは当然ですが、一方で、ある一時期にこの世にCSCDというものが存在しているということそれだけで、社会への関わりどころか宇宙への発信がいやおうなく成されているのだという、そういう「素っとぼけた」視点も失わないようにしないと面白くないと思います。

コミュニケーションをデザインするということ

高田　CSCDの第一期の計画期間が今年度末をもって終了し、ちょうど今、次年度以降の組織編制についてセンターの将来構想のワーキングや教授会で検討中ですが、ここでも、われわれをどこにどう位置付けるかをめぐって、話が少し滞るという印象を受けます。これまでからあった科学コミュニケーション、臨床、アート、減災の各部門のうち、メンバーの交代などで、減災がコミュニティーとなって、そこに森栗さんや林田さんがお入りになる。これは、移籍の際に、町づくりといった

ことが考えられていたことの延長で、それなりにうまく収まったと思います。われわれは、移籍の際には、カルチャーというカテゴリーが提案されていたりもしたのですが、今回の組織編制では、それは実現しそうにない。それで、他の四つのカテゴリーを下支えする部門というものを考えられています。これは従来、先の四つの部門のほかに「支援」という部門があって、これを引き継ぐものなのですが、われわれを取り込む上で、その性格付けをどうしたらいいか、簡単に話がまとまらないのです。あえてそれをコミュニケーションデザインという名称で括るということで落ち着きそうですが…。その過程で、リンクとか、ラボカフェとかいろいろな案が浮上しました。

小林　確か、一時期、コモンズとしてはどうかとも言われていましたね。名称はともかく、コミュニケーションの哲学的な考察ということで、納得していてはいけないのですか。私はそれで特に不都合はないと思うのですが…。ただ、そうは言っても、これは、センターそのものの在りように関わることですが、コミュニケーションをデザインするというのには、私も多少引っ掛かりがあるのです。

高田　人と話をする際に、どう話を進めたらよいのか、誰だって常に多少、算段するものだと思います。ただ、これからの話をどう展開するか、講義のようにひとりで話を進めてゆくのならいざ知らず、相手との相互の関係性の中でそれが展開してゆく、そういったときにあらかじめデザインするということが可能か、あるいはそのようにいろいろ算段するのがよいのか、ちょっと分からないですね。あまりそういうことに気を回しすぎると、コミュニケーションというより、何か戦術や下心のようなものが前に出てきそうな気がします。

小林　私が考えているのは少し別のことです。コミュニケーションということを意識の志向対象とするというのは、極端に言うと、やや神経症的な在りようではないでしょうか。意識の志向対象はあくまで具体的な主題にあるべきであって、どのようにコミュニケーションをするべきか、そのマナーに専心すると、コミュニケーションということの趣旨から外れるのではないか、と思うのです。コミュニケーションの作法の専門家というのは、少々矛盾してはいないか。コミュニケーションが専門分野たりうるか。

高田　最近は減った仲人もそうですが、誰かと誰か、何かと何かをマッチングするという専門職があります。

小林　それはもちろん目標としてマッチングがあるわけです。その仕方を研究するのが、はたしてコミュニケーション学なのかどうか、です。もちろん、コミュニケーションについてのメタ思考は必要です。学問ですから。ただ、それだとむしろ座学ということになります。具体的なコミュニケーションを行なう上で、何らかの形でつまずいたときに反省する、それは必要だと思います。しかし、そのマナーを研究する、コミュニケーション全体の在りようを主題化する、そうすると内容がなく形式だけの議論になりかねないか、という危惧も感じるのです。

ただ、今回の組織の見直しについては、いずれにせよ、私たちが哲学をやってきた以上、今後の構想の中にそういった環が置かれ、そこにコミュニケーションデザインという名が冠されるのなら、コミュニケーションの中に潜むメタフィジカルなものについて考える場と捉えて、私としてはそれを前面に押し出すほかないと思っています。高田さんも、それで開き直るのはいかがですか。

高田　そう開き直れるだけの気概と迫力があるといいのですが…。

（2009年6月23日　箕面キャンパスにて）